

東洋學論叢

清水 乞 教授退任記念号

インド芸術の理念と目的―最終講義抜粋―

清水 乞 (10)

書簡に見る親鸞と慈信房善鸞

森 章司 (27)

西田幾多郎と真宗

竹村 牧男 (74)

『念佛鏡』に見る八世紀後半の禪の動向

伊吹 敦 (95)

『八千頌般若』の一切智

渡辺 章悟 (165)

―sarvajña, sarvajñatva, sarvajñatā―

カビール『बीज्याク』和訳余滴

橋本 泰元 (172)

―智慧の34―

チベット語訳仏典成立過程の考察

川崎 信定 (184)

―『中観心論』第九章・第十章梵本・藏訳テキスト対照研究―

第七格の意味と用法

菅沼 晃 (214)

―Siddhāntakamūdi, Kāraṅkaprakaraṇa 訳註(9)―

東洋大学文学部紀要第56集

印度哲学科篇

XXVIII



清水 乞 教授 近影

清水 乞教授 略歴・業績目録

略歴

- 昭和 七年 八月 兵庫県に生まれる
- 昭和二六年 三月 大阪府立春日丘高等学校卒業
- 昭和二八年 四月 同志社大学文学部英文学科入学
- 昭和三三年 三月 同大学卒業
- 昭和三五年 四月 東洋大学文学部仏教学科入学
- 昭和三七年 三月 同大学卒業
- 昭和三九年 三月 同大学院同課程修了
- 昭和四二年 三月 同大学院文学研究科仏教学専攻博士課程進学
- 昭和四二年 四月 同大学院同課程単位取得退学
- 昭和四二年 四月 大東文化大学教養課程専任講師就任
- 昭和四七年 三月 同大学退職
- 昭和四七年 四月 東洋大学文学部専任講師就任
- 昭和四九年 四月 同大学助教授に昇任

昭和五六年 四月 同大学教授に昇任

平成 七年 博士（文学）の学位を受ける

著書・編著・共著

『アジア仏教史・インド編Ⅳ 密教』（共著、佼成出版社、昭和四九年六月）

『仏具辞典』（編著、東京堂出版、昭和五三年九月）

The Bhāgavata-purāna Miniature Paintings from the Bhandarkar Oriental Research Institute Manuscript Dated 1648 / with an Introduction and Synopses Written by Tadashi Shimizu; Translated by Rolf W. Giebel, Centre for East Asian Cultural Studies for Unesco, 1993.

分担執筆

「密教の歴史—インド密教概説」（宮坂宥勝ほか編『講座 密教』2、春秋社、昭和五二年三月）

「密教にとつての美術」（加藤敬写真、杉浦康平構成『マンダラ—出現と消滅—西チベット仏教壁画の宇宙』「マンダラ—出現と消滅—展」図録、昭和五五年七月）

「仏教美術における菩薩思想—観想行とその造形化を中心として」（西義雄博士頌寿記念論集刊行会編『西義雄博士頌寿記念論集 菩薩思想』、大東出版社、昭和五六年五月）

「『千手四十手深要決』—密教図像論序説」（森重樹編『梅尾コレクション 顕密典籍文書集成』別巻、平河出版社、昭和五六年九月）

「密教事相の基調―梅尾博士の研究及び蔵書と関連して」（同右）

「九曜 (Navagraha) とその画像」（勝又俊教博士古稀記念論集刊行会編『勝又俊教博士古稀記念論集 大乘仏教から密教へ』、春秋社、昭和五六年九月）

「マンダラと美的情趣（ラサ）」（松長有慶編『マンダラの世界』講談社、昭和五八年五月）

「マンダラの心象」（金岡秀友ほか編『空海と密教宇宙』朝日カルチャー叢書1、光村図書出版、昭和五九年三月）

「道場観と密教図像（一）」（壬生台舜博士頌寿記念論集刊行会編『壬生台舜博士頌寿記念論集 仏教の歴史と思想』昭和六〇年二月）

「密教における菩薩」（金岡秀友博士還暦記念論文集刊行会編『金岡秀友博士還暦記念論文集 大乘菩薩の世界』佼正出版社、昭和六三年七月）

「仏教の芸術と儀礼」（菅沼晃編『講座 仏教の受容と変容・インド編』佼成出版社、平成三年一〇月）

「初期ラーガ・ディヤーナについて」（東洋大学東洋学研究所編『アジアにおける宗教と文化』国書刊行会、平成六年三月）

「インド音楽論より見たチャルヤーギーティ」（石上善応教授古稀記念論文集刊行会編『石上善応教授古稀記念論文集 仏教文化の基調と展開』山喜房佛書林、平成一三年五月）

雑誌論文

「本尊仏の成立とその意義」（『東洋大学大学院紀要』二、昭和四〇年九月）

「Some Aspects of Medieval Indian Painting in the Vishnuharmottara-purāna」（『印度学仏教学研究』一五一―一、

昭和四一年(二月)

「文献にみられるインド絵画の分類—Viṣṇudharmottara-purāṇaを中心として」〔印度学仏教学研究〕一六一—、昭和四二年(二月)

「Viṣṇudharmottara-purāṇaに見られる自然描写の意義—ituの場合」〔印度学仏教学研究〕一七一—、昭和四三年(二月)

「中世インド壁画の一考察」〔大東文化大学紀要 教養編〕一、昭和四三年八月)

「インド神像の形態観念—viṣṇuの場合」〔大東文化大学紀要 教養編〕二、昭和四四年七月)

「The Viṣṇudharmottara-purāṇa Na. III, Ad. 30 and the Nāṭya śāstra Ad. 6 — a comparative study」〔印度学仏教学研究〕一八一—、昭和四四年(二月)

「シルパ・シャーストラにおける絵画論」〔東洋学研究〕五、昭和四六年三月)

「Śhāpati(建築家)に代表されるインド芸術家の特性」〔印度学仏教学研究〕一九—二、昭和四六年三月)

「インド絵画における素描」〔大東文化大学紀要 教養編〕四、昭和四六年三月)

「インド芸術学考—その成立と展開」〔東洋研究〕二八、昭和四七年六月)

「インド中世におけるブロンズ像とその鑄造法」〔東洋大学紀要 文学部篇〕二六、昭和四七年(二月)

「インド中世における造形美術批評」〔日本仏教学会年報〕三八、昭和四八年八月)

「Samarāṅgaṇasūtradhāra 第三章 Aprayojyaprayojya—建築裝飾モチーフについて」〔印度学仏教学研究〕二二—一、昭和四八年(二月)

「梵文造像量度経注釈概説」〔東洋学研究〕一八、昭和四九年五月)

- 「密教研究文献目録①」〔月刊 密教講座〕一一一、昭和四九年九月
- 「密教美術《インド》―密教美術の本質とその周辺（一）～（二二）」〔月刊 密教講座〕一一一～一一二、昭和四九年九月～昭和五二年九月
- 「マンダラの実践と造型」〔現代宗教〕一一二、昭和五〇年七月
- 「Arā(礼拝像) 要請の一側面」〔印度学仏教学研究〕二四―一、昭和五一年三月
- 「インド建築の起源伝説（インド建築の起源神話）」〔月刊 密教講座〕別巻六、昭和五一年四月
- 「Kāśyapaśīpa śāstra 所説の塑像技法」〔東洋学研究〕一一、昭和五二年三月
- 「シルバラトナの絵画論」〔月刊 密教講座〕一一一、昭和五二年六月
- 「都市・寺院・マンダラ」〔月刊 密教講座〕一一二、昭和五二年九月
- 「仏道と美術」〔東方界〕四八、昭和五二年一月
- 「インド宗教儀礼と造形」〔日本仏教学会年報〕四三、昭和五三年八月
- 「後期インド密教図像と情趣論」〔東洋学論叢〕四、昭和五四年三月
- 「観音の原像をめぐって」〔遊〕、昭和五四年四月
- 「如是我観」〔水墨〕一六、昭和五六年四月
- 「知恵の世界を観想する」〔宗教工芸―宗教における造形とは〕三一七、昭和五七年一月
- 「六十四瓚伽女とその図像資料」〔密教図像〕創刊号、昭和五七年六月
- 「仏教図像の地平」〔アーガマ〕三六、昭和五八年二月
- 「インドの絵画論1～8」〔仏画〕一～八、日貿出版社、昭和五八年五月～昭和六〇年九月

- 〔道場観と密教図像（二）〕〔東洋学論叢〕九、昭和五九年三月〕
- 〔生駒宝山寺本『覚禪鈔』について―奥書を中心として〕〔東洋学研究〕一八、昭和五九年三月〕
- 〔シルパ文献における図像資料（一）―『ルーパマンダナ』を中心として〕〔東洋学論叢〕一一、昭和六一年三月〕
- 〔虚空蔵菩薩の形像〕〔大法輪〕五三―九、昭和六一年九月〕
- 〔シルパ文献における図像資料（二）―『ルーパマンダナ』本論を中心として〕〔東洋学論叢〕一二、昭和六二年三月〕
- 〔ラーガ・マラー研究序説〕〔東洋学論叢〕一三、昭和六三年三月〕
- 〔インド戯曲論にみられる男性観〕〔東洋学研究〕二二、昭和六三年三月〕
- 〔ラーガ・マラー画における映像と表現〕〔東洋学研究〕二三、平成元年三月〕
- 〔仏の造型―その意味と表現―観音の図像解釈〕〔近代の美術〕別冊「仏像を旅する」、至文堂、平成三年一月〕
- 〔B. O. R. I. 所蔵 Rāgarāgini-svarupāni の写本〕〔東洋学論叢〕一六、平成三年三月〕
- 〔八千頌般若經の写本と挿図〕〔日本の美術〕三一〇、至文堂、平成四年三月〕
- 〔インド造型と美的体験〕〔日本の美術〕三一―、至文堂、平成四年四月〕
- 〔インド絵画の批評と技法〕〔日本の美術〕三二―、至文堂、平成四年五月〕
- 〔密教儀礼におけるイメージの重層性〕〔日本仏教学会年報〕五七、平成四年一〇月〕
- 〔インド古典音楽書における音―音楽の心象化をめぐる〕〔東洋学論叢〕一八、平成五年三月〕
- 〔Kṣenakarṇa: Rāgamālā の写本〕〔東洋学論叢〕一九、平成六年三月〕
- 〔初期ラーガ・ディヤーナについて〕〔東洋学研究〕三一、平成六年三月〕

- 「Saṅgīadarpana 所説の観想図像 (rāgadhyaṇa)」〔東洋学論叢〕二一〇、平成七年三月）
 「Pañcamasārāsāṃhita 所説の観想図像」〔東洋学論叢〕二二一、平成八年三月）
 「Rasakaumudī 所説の観想図像 (rāga-dhryana)」〔東洋学論叢〕二二二、平成九年三月）
 「Paṇḍarī Vīṭhala 著 Rāgamāla 所説の観想図像」〔東洋学論叢〕二二三、平成一〇年三月）
 「観仏から造仏へ」〔日本仏教学会年報〕六三、平成一〇年八月）
 「Rāgavibodha の観想図像とラーガの継承」〔東洋学論叢〕二二四、平成一一年三月）
 「Saṅgītanārāyaṇa 所説の観想図像」〔東洋学論叢〕二二五、平成一二年三月）
 「Kumbhakarṇa 作：Rasikapriyā に見られる歌謡—Dasāvatarākīrtihavalā-prabandha に ついて」〔東洋学論叢〕二二六、平成一三年三月）
 「ラーガのランジャナ（心を彩る）作用」〔東洋学論叢〕二二七、平成一四年三月）

研究室報告

- ① 清水乞先生が本年度末をもって定年により大学を去られることを承けて、平成十五年一月十六日に最終講義をお願いした。在学生や卒業生を中心に多くの聴衆を得て、大変な盛況であった。引き続き、会場を甫水会館に移して懇親会を開き、楽しい一時を過ごすことができた。
- ② 本年度より、専任教員（教授）として竹村牧男氏を迎えた。竹村氏は、平成十二年度に退任された田村晃祐教授の後を襲って「日本仏教史」などの授業を担当された。
- ③ 本年度の本学役職としては、菅沼晃教授が引き続き評議員を担当した（森章司教授は文学部長を退任した）。
- ④ 本年度も学科として新入生歓迎行事を充実させることに意を注いだ。特に、ゼミ連絡会議の発案のもと、平成十四年四月七日に「フレッシュマンキャンプ・イン・ワンデー」と銘打って行われた新入生歓迎球技大会では最高の盛り上がりを見せ、多くの参加者を得て、新入生同士、あるいは新入生と上級生の交流を促すという点で、大いに効果をあげることができた。
- ⑤ 本年度も「ゼミ活性化対策」として中国社会科学院世界宗教研究所研究員の嘉木揚凱朝氏、ならびにインド舞踏家の川原田文香女史をお招きして、それぞれ「モンゴル仏教の歴史」、「インド古典舞踏の理論と実際」と題して講演をして頂いた（平成十四年五月二十三日、十一月二十九日）。お二方も、当事者、実践者ならではの内容で、学生たちの好奇心を大いに駆り立てたようであった。
- ⑥ 本年度は、平成十四年六月一日に本学を会場にして仏教思想学会を開催した（発表会場…一三〇八教室、懇親会…スカイホール）。多くの出席者を得、また、活発な討論が行なわれ、学会は大成功であったが、その陰に大学院生たちの尽力があったことは特筆すべきである。
- ⑦ 本年度は、平成十四年十二月十九日に、駒澤、立正、大正の各大学の学長をお招きし、スカイホールを会場として四大学学長会議を開催した。本学からも神田学長、大塚常務を初めとして、学科主任、大学院専攻主任などが出席して、私立大学の将来の展望などに関して活発な意見交換が行なわれ、大学や学科にとって甚だ有益であった。
- ⑧ 本年度、初めての試みとして、平成十四年十一月三日、スカイホールを会場に「印度哲学科大同窓会―第一結集2002」を開催した。これは印度哲学科の卒業生が中心となって開いたものであったが、卒業生や在校生など、思いの外、多くの参加があり、広い会場では、あちらこちらで昔の話題に花が咲き、皆で楽しい時間を過ごすことができた。
- ⑨ 本年度も大学院の研究発表会を前期（七月十七日）と後期（十二月十二日）に開催した。前期の発表者は伊東昌彦（M

1)、満達(M2)、今野道隆(D1)、圓井力(D2)、富田雅史(D3)、熊田順正(D3)の六人、後期の発表者は赤坂史人(M1)、林香奈(M1)、堀井晶子(M2)、松原茂樹(D2)、出野尚紀(D3)、熊田順正(D3)の六人であった。

⑩ 本年度の朝霞校舎でのティーチング・アシスタントは、大学院後期課程の出野尚紀君が一人で担当した。

⑪ 本年度の卒業論文・卒業制作の提出者は、I部が六十七名、II部が三十三名であった。本年度の優秀論文に対する褒賞は、以下の通りである。田村芳朗奨学基金受賞者―吉次通泰(I部)。勸学奨学基金受賞者―松田雅彦(I部)、江成紀子(II部)、校友会学生研究奨励基金受賞者―布施祥太(I部)、横田由美子(II部)、満達(大学院)。

平成十四年度業績(平成十四年一月〜十二月)

菅沼 晃

△論文▽

「新仏教運動の旗手たち―境野黄洋と高島米峰の理性主義・常識主義」(単著、「大法輪」一月号、平成十四年一月一日、A5判、四七〜五三頁)

「第六格の意味と用法―Siddhantakamudī Karakaparakaraṇa 訳註(8)」(単著、「東洋学論叢」第二十七号(「東洋大学文学部紀要」第五五集(印度哲学科篇))、平成十四年三月三十日、A5判、一一〇〜一七四頁)

「自心の浄化と国土の浄化―共にあることのよろこびを目指して」(単著、「平和と宗教」第二一号、平成十四年十二月十三日、A5判、一六〜二九頁)

△その他▽

「モンゴル仏教の魅力 モンゴル仏教紀行①」(単著、「春秋」四三五号、平成十四年一月二十五日、A5判、一二〜一五頁)

「空に舞った経典―モンゴル国の仏教弾圧 モンゴル仏教紀行②」(単著、「春秋」四三六号、平成十四年二月二十五日、A5判、一九〜二二頁)

「故都カラコルムと周辺の寺々 モンゴル仏教紀行③」(単著、「春秋」四三七号、平成十四年三月二十五日、A5判、一二〜

一五頁)

「モンゴル仏教の総本山・ガンタン寺 モンゴル仏教紀行④」
(単著、「春秋」四三八号、平成十四年四月二十五日、A5判、二〇～二三頁)

「内モンゴルの首都フフホト市内の寺々 モンゴル仏教紀行⑤」
(単著、「春秋」四三九号、平成十四年五月二十五日、A5判、二一～一五頁)

「焼き捨てられた版本・ウォスト・ジョウウ モンゴル仏教紀行⑥」
(単著、「春秋」四四二号、平成十四年八月二十五日、A5判、一二～一五頁)

「シリンドル草原の活仏と詩人たち モンゴル仏教紀行⑦」(単著、「春秋」四四二号、平成十四年九月二十五日、A5判、一二～一五頁)

「シリンドルから百霊廟へ モンゴル仏教紀行⑧」(単著、「春秋」四四三号、平成十四年十月二十五日、A5判、二〇～二三頁)

「バオトウ周辺の寺々 モンゴル仏教紀行⑨」(単著、「春秋」四四四号、平成十四年十一月二十五日、A5判、一六～一九頁)

「アラシャン盟の寺々―福因寺・延福寺・広宗寺 モンゴル仏教紀行⑩」(単著、「春秋」四四五号、平成十四年十二月二十五日、A5判、二五～二八頁)

△学芸活動▽

所属学会ならびに役職

日本印度学仏教学会理事／日本宗教学会評議員／日本仏教学会 禅学研究会／日本近代仏教史研究会

△調査活動▽

「東洋思想における心身観」(日本私学振興・共済事業団平成十四年度学術振興資金による研究、研究代表者)

「日本における死の受容―文学・仏教・キリスト教信仰にみる看取りの様態」(平成十四年度科学研究費による研究、研究分担者(研究代表者・高城功夫))

△教育活動▽

学内担当科目

学部 インド宗教史(朝霞、I部／白山、II部)

インド古典講読①(朝霞、I部)

インド哲学仏教学演習(白山、乗入れ)

大学院 サンタクリット文献研究・印度哲学研究指導I(前期)

印度哲学特殊研究II・印度哲学研究指導I(後期)

市民大学等

日曜講義「インドの哲学と宗教入門」(平成十三年一月～十二月、十回、東洋大学)

その他

インド思想研究会顧問(月一回の研究会でRamayana第一篇

第十三章を講読)

△社会活動▽

庭野平和財団評議員／大法輪石原育英会理事、宝積比較宗教・文化研究所顧問、東洋大学校友会会長

講演「現代に生きる井上円了の思想」(校友会千葉支部講演会、平成十四年一月二十七日、千葉県佐倉市)

講演「名僧列伝・道元」(朝日カルチャーセンター千葉、平成十四年五月十三日、千葉市)

講演「モンゴル仏教の復興」(在家仏教協会講演会、平成十四年六月十三日、東京・在家仏教協会)

講演「仏教と共生―共生の原理としての非暴力」(東海学園仏教公開講座、平成十四年六月二十九日、名古屋市・東海学園)

講演「大学で何を学ぶか」(入間向陽高校、平成十四年七月九日、埼玉県入間市)

講演「井上円了の思想」(校友会大阪支部講演会、平成十四年九月一日、大阪市)

講演「平和の原理としてのヨーガ」(日本ヨーガ光麗会、平成十四年九月七日、京都府宇治市)

講演「共生の原理としての仏教思想―非暴力を实践した人々」(哲学たいけん村無我苑・後期哲学講座、平成十四年十月十二日、十九日、二十六日愛知県碧南市)

講演「アーユルヴェエダとヨーガ」(日本ヨーガ光麗会、平成十四年十二月七日、東京・増上寺)

講座「維摩経を読む」(清風仏教講座、平成十四年四月二十日、

五月十八日、六月十五日、七月十三日、八月十七日、九月二十一日、東京・全生庵)

講座「正法眼蔵随聞記を読む」(朝日カルチャーセンター千葉、平成十四年十月二十八日、十一月二十五日、十二月九日、千葉市)

△大学・学部の管理・運営▽

学校法人東洋大学評議員

清水 乞

△論文▽

「ラーガのランジャナ(心を彩る)作用」(単著、「東洋学論叢」第二七号(「東洋大学文学部紀要」第五五集(印度哲学科篇))、平成十四年三月三十日、A5判、八六―一九頁)

△学会活動▽

所属学会ならびに役職

日本印度学仏教学会評議員／密教图像学会評議員／日本仏教学会

△調査活動▽

「東洋思想における心身観」(日本私学振興・共済事業団平成十四年度学術振興資金による研究、研究分担者(研究代表者)・菅沼晃)

△教育活動▽

学内担当科目

学部 サンスクリット文献講読①・②(朝霞)

美術史①(朝霞)

インド哲学仏教学演習(白山、乗入れ)

大学院 仏教学特論Ⅱ・印度哲学研究指導Ⅱ(前期)

印度哲学特殊研究Ⅲ・印度哲学研究指導Ⅱ(後期)

森 章司

△著書▽

『原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究5』(編著、中央学術研究所、平成十四年五月十三日、A4判、二一四頁)

『原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究6』(編著、中央学術研究所、平成十四年十月二十日、A4判、二七二頁)

△論文▽

「由旬(yojana)の再検証」(共著、「原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究6」〈中央学術研究所、平成十四年十月二十日、A4判〉A4判、一〇五頁)

△その他▽

“Science and Buddhism”(単著、*The Journal of Oriental Studies*, vol.12, The Institute of Oriental Philosophy, 平成十四年十二月、A5版、六五〇七九頁)

「仏教のものの方―あるがままに見る」(単著、日本能率協会、平成十四年十二月四日、B5判、三七頁)

△学会活動▽

所属学会ならびに役職

日本印度学仏教学会理事／地域文化学会理事／日本宗教学会

／日本仏教学会／比較思想学会／仏教思想学会

△調査活動▽

「東洋思想における心身観」(日本私学振興・共済事業団平成十四年度学術振興資金による研究、研究分担者(研究代表者・菅沼晃))

△教育活動▽

学内担当科目

学部 仏教学概論(朝霞Ⅰ部／白山Ⅱ部)

インド哲学仏教学演習(白山、乗入れ)

大学院 初期仏教研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅰ(前期)

仏教学特殊研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅰ(後期)

△社会活動▽

講演「仏教のものの方―あるがままに見る」(一隅会、平成十四年八月二十二日、芝パークホテル)

講演「釈尊はどのような生活をされていたか―スマナサーラ長老とともに考える」(中央学術研究所公開シンポジウム、平成十四年十二月十三日、普門館・国際会議室)

△大学・学部の管理・運営▽

文学部長(十一月三十日まで)／東洋学研究所研究所員

川崎信定

△論文▽

「死を起点として捉えた生とは?」『チベットの死者の書』からのメッセージ (第三六八回一隅会紀要) 財団法人日本能率協会、平成十四年一月十日、A4判、一〜六四頁)

「般若心經」以前・以後 (第三六回高野山安居会記録集) 高野山真言宗教学部、平成十四年二月二十二日、B6判、二四三〜三二八頁)

△その他▽

「哲学とは難しい学問ではなく、モノの見方や人の生き方を考える学問」(2002栄冠めくしてSPECIAL)人文科学系学部特集号「河合塾全国進学情報センター」、平成十四年二月十四日、七五頁)

「東洋学研究所の将来に関わる本年度の経過について」(「東洋学研究」第三九号、平成十四年三月三十一日、一〜五頁)

△学会活動▽

所属学会ならびに役職

日本西蔵学会委員 / 仏教思想学会理事 / 日本宗教学会理事
(日本宗教学会賞審査委員長) / 日本仏教学会理事 / 比較思想学会評議員 / 日本印度学仏教学会評議員 / 財団法人東方学会評議員 / 真言宗豊山派教学審議会委員

学会における研究発表

「パヴィヤの自然観」(日本仏教学会学術大会発表、平成十四年

九月二十九日、京都女子大学)

△調査活動▽

「東洋宗教文化の比較研究」(東洋大学東洋学研究所プロジェクト、研究代表者)

「葬制・墓制にみる日本の死生観」(平成十四年度文部科学省科学研究費による研究、研究分担者(研究代表者:高城功夫))

「東洋思想における心身観」(日本私学振興・共済事業団平成十四年度学術振興資金による研究、研究分担者(研究代表者:菅沼晃))

△教育活動▽

学内担当科目

学部 宗教学概論(白山、乗入れ)

仏教思想論Ⅱ(白山、乗入れ)

チベット文献講読(白山、乗入れ)

インド哲学仏教学演習(白山、乗入れ)

インド文学(白山、乗入れ、非常勤講師の急病代講・3ヶ月)

大学院 仏教学演習Ⅰ・仏教学研究指導Ⅱ(前期)

仏教学特殊研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅲ(後期)

学外担当科目

インド思想史(早稲田大学文学部)

東洋哲学特殊問題①(早稲田大学大学院文学研究科)

総合文化プログラム(文化情報科学群)(放送大学大学院)

△社会活動▽

財団法人東方研究会理事／東洋学報(東洋文庫)編集委員／財団法人東洋文庫兼任研究員／財団法人仏教交流センター評議員／東京大学仏教青年会評議員

社会的活動

講演「仏の智慧と人間の知恵」(二〇〇二年度築地本願寺仏教

文化講座、平成十四年十一月三十日、築地本願寺)

講演「仏とは？」(第一回真言宗豊山派教師教養講習会、平成

十四年九月十七日、文京区音羽真言宗豊山派宗務所)

講演「諸行無常」(第二回真言宗豊山派教師教養講習会、平成

十四年十月二十二日、文京区音羽真言宗豊山派宗務所)

講演「般若心経」(第三回真言宗豊山派教師教養講習会、平成

十四年十一月十九日、文京区音羽真言宗豊山派宗務所)

△大学・学部の管理・運営▽

(財)井上円了記念学術研究センター運営委員／東洋学研究所員

竹村牧男

△著書▽

『ブツダの宇宙を語る―華嚴の思想 上』(単著、NHK出版、

平成十四年四月一日、A5判、一九七頁)

『ブツダの宇宙を語る―華嚴の思想 下』(単著、NHK出版、

平成十四年十月一日、A5判、一八五頁)

『西田幾多郎と仏教』(単著、大東出版社、平成十四年十一月二

十七日、A5判、二七二頁)

『禪の哲学』(単著、沖積社、平成十四年七月一日、四六判、二

〇七頁、『はじめての禪』改題再刊)

△論文▽

『道元の修証論』(単著、今井雅晴編『中世仏教の展開とその基

盤』大蔵出版、平成十四年七月三十日、A5判、五八―八五

頁)

『華嚴思想のキーワード』(単著、『大法輪』平成十四年十月号、

A5判、一〇二―一〇七頁)

『良寛さまの法華経1』(単著、『在家仏教』平成十四年十一月

号、A5判、二四―三三頁)

『良寛さまの法華経2』(単著、『在家仏教』平成十四年十二月

号、A5判、七六―八三頁)

『縁起と個物』(単著、『大乘禪』平成十四年十一月号、A5判、

三九―五〇頁)

△学会活動▽

所属学会ならびに役職

日本印度学仏教学会理事／仏教思想学会理事／日本宗教学会

評議員・『宗教研究』編集委員／比較思想学会理事／東方学

会

△教育活動▽

学内担当科目

学部 日本仏教史(朝霞、I部、白山、II部)

インド哲学仏教学演習(朝霞、I部)

インド哲学仏教学演習(白山、乗入れ)

大学院 日本仏教研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅲ(前期)

仏教学特殊研究Ⅳ・仏教学研究指導Ⅲ(後期)

学外担当科目

印度哲学特論・宗教学特殊講義(金沢大学大学院文学研究科・

文学部、平成十四年七月十日～十三日)

比較思想論特講・比較思想(横浜市立大学大学院国際文化研

究科・国際文化学部、平成十四年七月二十九日から三十一

日、平成十五年一月六・七・九日)

宗教学(山梨大学教育人間科学部、平成十四年九月二～四日)

インド仏教史各論・インド仏教史特論(東北大学大学院文学

研究科・文学部、平成十四年十一月十一～十四日)

△社会活動▽

学術講演

「清沢満之と寸心・大拙」(日本近代仏教史研究会第十回研究大

会特別講演、平成十四年五月十八日、東洋大学スカイホール)

「道元の修証論」(愛知学院大学禅研究所研究会、平成十四年六

月七日、愛知学院大学禅研究所)

「縁起と個物―仏教と西田哲学」(第五六回哲学学会大会(上智哲

学会)、平成十四年六月二十九日、上智大学7号館)

「西田幾多郎の真宗観」(西田幾多郎記念哲学館・金沢大学共催

講演会、平成十四年七月十三日、西田幾多郎記念哲学館哲学

ホール)

一般講演

「禪と浄土―大拙の仏教観に学ぶ」(在家仏教協会、平成十四年

三月二十三日、大手町ビル)

「釈尊のさとりととは何か」(ニッセイ基礎研究所・財団法人興福

会主催「なら興福寺文化講座」、平成十四年四月十八日、日生

劇場7階(国際ホール)

「仏教Ⅰ―その言語と存在の分析の地平」(ワタリウム美術館

2002・アジア哲学・一日アート哲学、平成十四年六月二

十一日、ワタリウム美術館)

「良寛さまの詩(うた)」(祥龍寺平成十四年秋季彼岸会法要、

平成十四年九月二十日、祥龍寺)

「元氣のみがき方」(平成十四年度社団法人生命科学振興会北海

道支部例会(いのちを考える会)市民公開講演会、平成十四

年九月二十八日、KKRホテル札幌)

「現代社会と宗教の役割」(文化庁文化部宗務課主催、平成十四

年度宗教法人口指導者講習会(東京会場)平成十四年十二月十

六日、東京ガーデンパレス)

講座

「唯識三十頌を読む」(朝日カルチャーセンター、四～六月期、

十月～十二月期、新宿住友ビル)

「漢文仏典講読会」(東京大学仏教青年会、月二回出講、東京大

学仏教青年会)

「東西の宗教哲学」(上智大学コミュニティカレッジ、十月二十三日・三十日、上智大学)

「ブッタの宇宙を語る―華嚴の思想」(NHKテレビ)「ころの時代 宗教・人生」毎月放送、平成十四年四月～平成十五年三月)

△大学・学部での管理・運営▽

大学院仏教学専攻主任／文学部自己点検・評価委員／印度哲学科図書委員／東洋学研究所研究所員

橋本泰元

△著訳書▽

『宗教詩ビージャク―インド中世民衆思想の精髓』(単著、平凡社「東洋文庫」第七〇三巻、平成十四年六月十日、全書判、四一〇頁)

△その他▽

「インド 民のことば」(単著、「月刊百科」四七九号、平凡社、平成十四年九月一日、A5判二段組、四九～五一頁)

△学会活動▽

所属学会ならびに役職

日本印度学仏教学会評議員／日本南アジア学会／日本宗教学会／日本仏教学会

学会における研究発表

"Status of Studies on the Medieval Hindi Literature in Japan

with Special References to Translating Kabir's *Bijak*,"
Indo-Japan Conference on Enduring Ties between India &
Japan through Literature: Its History and Future Pros-
pects, 26 October 2002, India Habitat Center, New Delhi

△調査活動▽

「東洋思想における心身観」(日本私学振興・共済事業団平成十四年度学術振興資金による研究、研究分担者(研究代表者:菅沼晃))

△教育活動▽

学内担当科目

学 部 ヒンドウー教概説(朝霞、I部/白山、II部)

インド哲学仏教学演習(朝霞、I部)

インド哲学仏教学演習(白山、乗入れ)

ヒンディー文献講読(白山、乗入れ)

総合C(朝霞、I部、通年の三分の一学期を担当)

大学院 インド哲学研究II(中世インド思想研究)(前期)

インド哲学研究指導II(前期)

学外担当科目

ヒンディー語I(春学期)・II(秋学期)(大正大学)

中世ヒンディー宗教文学研究(前学期)(東京外国語大学)

△大学・学部での管理・運営▽

印度哲学科第I部主任／文学部内資格審査委員会委員／文学部

内外国語委員会委員／東洋学研究所研究所員

渡辺章悟

△学会活動▽

所属学会ならびに役職

日本印度学仏教学会幹事／日本佛教学会／日本宗教学会／北海道印度哲学仏教学会／仏教思想学会／日本西蔵学会／国際仏教学会（IABS）
学会における研究発表

「金剛般若」の偈頌（日本印度学仏教学会第五十三回学術大会、平成十四年七月六日、韓国・東国大学校）

「金剛般若の成立と二つの偈頌」（北海道印度哲学仏教学会第十八回学術大会、平成十四年七月二十七日、北海道・苫小牧駒澤大学）

△調査活動▽

「日本における死の受容―文学・仏教・キリスト教信仰にみる看取りの様態」（平成十四年度科学研究費による研究、研究分担者（研究代表者：高城功夫）、淡路島を中心に十三仏霊場を調査）

「東洋思想における心身観」（日本私学振興・共済事業団平成十四年度学術振興資金による研究、研究分担者（研究代表者：菅沼晃）

△教育活動▽

学内担当科目

学部 インド哲学仏教学演習（白山、乗入れ）

仏教思想論Ⅰ（白山、乗入れ）

インド仏教史（朝霞、Ⅰ部／白山、Ⅱ部）

総合B（白山、Ⅱ部）

大学院 大乘仏教研究Ⅱ（前期）

学外担当科目

近現代仏教研究（国際仏教学大学院大学）

△社会活動▽

財団法人仏教伝道協会英訳大蔵経編集委員会委員／同協会仏教聖典編集委員会委員／財団法人東方研究会研究員
講演「終末か末法か」（浄土真宗大谷派真浄寺講演会、平成十四年六月十三日、文京区千駄木真浄寺）

△大学・学部管理・運営活動▽

印度哲学科第Ⅱ部主任／文学部内資格審査委員会委員／文学部内カリキュラム検討委員会委員／井上円了記念学術センター研究員（円了研究部門）／東洋学研究所研究員／文学部リーフレット編集委員

伊吹 敦

△論文▽

「金春禪竹の能楽論に見る禪の影響―六輪―露説を中心に（下）」（単著、「東洋学論叢」第二十七号）、「東洋大学文学部紀要」第五五集、平成十四年三月三十日、A5判、一～六五頁）
「北宗禪系の『楞伽經疏』について」（単著、「東洋学研究」第

三九号、平成十四年三月三十日、B5判、三五二～三七六頁）
「法句經」の成立と變化について」（単著、「仏教学」第四四号、平成十四年十二月二十日、A5判、後一～二六頁）

「念佛鏡」に見る禪の影響（単著、「印度学仏教学研究」第五卷第一号、平成十四年十二月二十日、A5判、七一～七八頁）

△事典等分担執筆▽

「一師印証」「一知半解」「一転語」「慧能」「円密一致」「応無所住而生其心」「開元釈教録」「画餅」「寒山詩」「寒山寺」「看話禪」「教外別伝」「公界」「工夫」「景德伝灯録」「現成公案」
「五家七宗」「語録」「坐禪」「茶飯」「参」「嗣法」「這箇」「十牛図」「粥座」「首楞嚴經」「清規」「禪」「即非」「祖堂集」「中峰明本」「庭前の柏樹子」「投機」「頓悟」「入室」「白隠」「父母未生以前」「不立文字」「法眷」「無師独悟」「無導師範」「莫妄想」「麻三斤」「遺偈」「楞嚴呪」「両序」「臨濟録」「靈知不昧」「六祖壇經」「無」の各項目（一部、加筆項目も含む。単著、『岩波仏教辞典 第二版』岩波書店、平成十四年十月二十五日、四六判）

△その他▽

「鈴木大拙の初期禪宗史研究」（単著『鈴木大拙全集』第三三巻「月報」、平成十四年六月七日、四六判、五～八頁）

△学会活動▽

所属学会ならびに役職

日本印度学仏教学会コンピュータ利用委員会委員／仏教思想学会／早稲田大学東洋哲学学会会計監査／日本仏教学会／財団法人東方学会
学会における研究発表

「關於禪宗系的《法句經疏》」（中日敦煌佛教学術会議、平成十四年三月十四日、北京・和平里大酒店）

「法句經」の成立と變化について」（仏教思想学会第十八回學術大会、平成十四年六月一日、東洋大学）

「念佛鏡」に見る禪の影響（日本印度学仏教学会第五十三回學術大会、平成十四年七月七日、ソウル・東國大學校）

△調査活動▽

「東洋思想における心身観」（日本私学振興・共済事業団平成十三年度學術振興資金による研究、研究分担者〈研究代表者…菅沼晃〉）

△教育活動▽

学内担当科目

学 部 中国仏教史（朝霞、I部／白山、II部）

禪の思想と文化（白山、乗入れ）

仏教漢文講読（白山、乗入れ）

インド哲学仏教学演習（白山、乗入れ）

仏教と社会（白山、乗入れ）

△社会活動▽

財団法人東方研究会兼任研究員

平成十四年度演習ゼミ活動報告

竹村牧男

インド哲学仏教学演習① 朝霞

① テーマ「鎌倉旧仏教の研究」

② メンバー 鈴木寛太（幹事）・井口綾子（副幹事）他、二年

生十名

③ 活動報告

本年度は、鎌倉時代の旧仏教の文献を読むことにより、仏教の基本的な用語や概念の知識を得るとともに、鎌倉新仏教が出てくる背景や、旧仏教の新仏教に対する批判を理解することを通して新仏教をより深く知ることを目標とした。

取り上げたテキストは、良遍の『法相一巻抄』（岩波日本思想大系『鎌倉旧仏教』所収）をとりあげた。この書をテキストに取り上げたのは、唯識の初心者へのもっとも易しい入門書であり、しかも唯識は大乗仏教の基礎学なので、大学二年生の仏教学初歩の者には、とてもふさわしいものと思われたからである。

われわれが読めたのは、上巻のすべてと、下巻の初め一部であったが、大乗のアビダルマ・五位百法をひととおり学ぶことができ

た。
演習は、毎回、予習してきてもらい、一文ずつ読んで意味を説明してもらい、これに私が解説を加えていくという形式で行った。

学生の出席状況は、よかった。予習は必ずしも十分とは思えなかったが、前期から後期へと向かうにつれて、仏教の教学の体系の全体の了解も進んできて、仏教思想への理解が深まったと考える。なお、合宿は行わなかったが、後期のある日、コンパを行い、親交を深めることが出来た。

橋本泰元

インド哲学仏教学演習② 朝霞

① テーマ「ヒンドゥー教思想入門」

② メンバー 中馬達郎（幹事）他、二年生十四名（一名退学）

③ 活動報告

昨年度と同様に、ヒンドゥー教の中心思想であるバクテイ（信愛・帰依）思想を、『バガヴァッド・ギーター』のなかに見ていくことを課題とした。

本年度前期には、インド文化に関するビデオ二、三本、解説も加えながら見せて、インド文化への関心を高めてもらうことに努めた。

前期後半から、『ギーター』の概説と文法的輪読に入った。初めに『ギーター』の使用テキスト（ヒンディー語注付き流布本）と和訳・参考書などの紹介・解説を行なった。次いで、昨年度に引き続き第二章の途中の頃から文法的読解の作業を輪読形式で開始した。本年度の受講者も格別熱心な人がいない代わりに、全般的にこの作業に取り組んだ。

例年ながら、インドの思想・文化に対するゼミ生の関心の程度と語学能力は千差万別であり、一つの演習ゼミとしてのクラス運営の難しさを感じざるを得なかった。

清水 乞

インド哲学仏教学演習① 白山（乗り入れ）

① テーマ「インド美学と芸術思想」

② メンバー 四年生二十二名、大学院一名

③ 活動報告

終年度であるため、演習ゼミのメンバーは四年生に限定し、一部生、十八人、二部生、四人、計二十二人でゼミを構成した。ゼミの幹事・副幹事は指名していない。

全員が卒業論文・制作を提出することを目標としてゼミ活動を開始した。①四月早々に、「論文・制作の計画書（論題とその概略及び文献資料、参考書）」を提出し、担当教員による批評と指導を行った。②ほとんど全員がラサ論を立論の基本としているので、論文・制作にラサ論をどのように適用するかを確認するために、全員が「ラサ論概説」のレポートを提出した。各人のレポートに基づいて、担当教員が批評し、個別の例を紹介しつつ、全員で議論・討論した。（以上、前期）

③夏休みの課題として「論文・制作の目次と概要」を制作して、全員が後期開始と同時に提出した。担当教員が前期の計画書と比較して、個別的に具体的な指示を与えた。同時に論文と制作の相

違、構成と形式など、基本的事項を指示した。その後、後期のすべてを個人の発表と討論に当てた。

議論・討論は活発であつたが、自分の問題意識を基本としつつも、他人の問題意識に参入し、個人的問題の幅を広げるといふゼミ活動の機能が十分に活用できなかつた。

上記、①②③のレポートを論文提出の必要条件としたので、レポートの提出は効果的であつた。

大学院生が毎時間出席し、学生の課題を理解してくれていたのが、院生による時間外の指導は有効であつた。

菅沼 晃

インド哲学仏教学演習② 白山(乗り入れ)

① テーマ「インド思想の人間観」

② メンバー 石羽沢まゆみ(ゼミ代表、後藤裕一郎(副代表、高野史・澤田容子(記録係)他、四年生六名、三年生十八名、二年生三名、大学院五名、大学院満期退学一名

③ 活動報告

1、本年度は、叙事詩文学班(B班)による Ramacaritam の講読、研究発表、哲学班(A班)による Lokanāya-tilaka の講読・研究発表、アーユルヴェーダ班(D班)による Astāṅgahṛdaya、Sūtrashāna の最初の部分の講読・発表が行われた。

2、平成十四年八月二日～四日、白馬山荘にて、インド思想研

究会、大学院ゼミと合同の夏期合宿研修を行なつた。四年生の卒論中間発表、哲学班の「Tika」に関する発表、大学院生の各自のテーマにもとづく学会形式での研究発表があり、懇親も含めて、極めて充実した合宿であつた。参加者は、ゼミ、研究会のOG、OBを含めて約五十名。

3、平成十五年二月、ゼミ報告書作成。

4、今年度は、三年生の出席が極めてよく、哲学班の「Tika」を中心とするインド現代史の発表も充実しており、最後のアーユルヴェーダ班の発表も、現職の医師、吉次さん(二部四年)を中心に、極めて学術的なインド医学の発表があつた。アーユルヴェーダの研究が、今後のこのゼミの特色となることを感じさせる本年度ゼミであつた。ほとんど百点満点を与えてもよい結果であると思われる。

橋本泰元

インド哲学仏教学演習③ 白山(乗り入れ)

① テーマ「中世ヒンドゥー教思想研究」

② メンバー 飯田洋行(幹事)他、四年生十五名、三年生十三名、院生一名

③ 活動報告

昨年度と同様に、「パーガヴァタ・プラーナ」において完成された民衆的なバクティ思想と、北インドにおける中・近世の民衆的なバクティ思想運動の展開を中心課題とした。

初めに、担当教員が新人ゼミ生を中心に使用テキスト（流布本で第十卷「ラーサの五章」と英訳、和訳、研究書およびヒンドゥー教関係の事典を中心とした参考書の紹介・解説を行なった。このテキストの輪読は、語学力増進を狙い主に三年生を中心に一回一頃の割合で行い、読み進めている。

この作業と併せて、原典読解に関心の薄いゼミ生のために、ヒンドゥー教女神研究の名著 David Kinsey, *Hindu Goddesses, Delhi: Motilal Banarsidass, 1987* の「ラクシュミー」章の後半部分の輪読も同時に三年生を中心に進行した。インド思想・文化に関する卒論・卒業制作で邦語資料にはかり頼る安易な作業を避け、新知見に接するために外国語文献を利用して欲しいと考えるからである。

本年度は、九月九日～十一日に稲取セミナーハウスで合宿研修を行い、四年生半数ほどの卒論中間発表と、三年生によるゼミ教材（英文研究書）の輪読を中心に活動し、充実できた。

渡辺章悟

インド哲学仏教学演習④ 白山（乗り入れ）

- ① テーマ「インド大乘仏教の研究」
- ② メンバー 丸杉伊作（前期幹事）・小長谷将人（後期幹事）
- 他、四年生七名、三年生五名

③ 活動報告

今年のゼミは特定のテキストを講読するという形式はとらず、

ゼミの構成員が自主的に研究テーマを選び、それを課題として各自がレポートするという形式をとった。

具体的には、最初にゼミの共通テーマを「仏教の生命観」と決定し、これに「個人テーマ」を組み合わせて、毎回発表してもらった。発表者は必ずハンドアウトを用意し、質問に備えることと、参加者は必ず一回以上質問することを義務づけた。

司会も原則的にはゼミ長が行ない、担当教員は最後に纏めるときの指導のみにとどめた。最初はぎこちない運営であったが、次に慣れてきて、毎回の発表は充実し、時間が足りなくなることがしばしばであった。ただし、発表者の出来如何によって充実度が極端に異なるため、運営に苦労したこともあった。この感想は参加者共通の意識ではなかったかと思う。

夏休みには担当者の実家である群馬の禅寺で二泊三日の合宿を行なった。また、サンスクリットによる『般若心経』の講読と読誦、漢訳經典の読誦に加え、毎朝の参禅、食事の作法など、大学では味わえない禅寺ならではの貴重な体験をすることができた。

今年は人数も少ないこともあって、ゼミの後に皆で集まって食事をしたりがたがたびあって、まとまりが良かった。

森 章司

インド哲学仏教学演習⑤ 白山（乗り入れ）

- ① テーマ「原始仏教研究」
- ② メンバー 酒井万里江（前期幹事）・戸次顕彰（後期幹事）

他、四年生十三名、三年生三名、大学院二名

③ 活動報告

共同研究と個人研究の二本立てで進めた。

共同研究のテーマは「原始仏教時代における比丘・比丘尼の生活」とした。昨年度まではティベート方式を取っていたが、今年度は銘々の発表形式を取った。ゼミでホーム・ページを立ち上げるに際して、原始仏教聖典の解説を分担して執筆することになり、それぞれが担当する文献から「生活」記事を採用して、発表することにしたからである。

テーマの性質から止むを得ない部分もあるが、結果は収斂できず、まとめて報告するほどのものは得られなかった。

しかしゼミ「原始仏教研究」のホーム・ページはアップされ公開されている。アドレスは <http://www2.toyo.ac.jp/~morimori/> で、コンテンツは「森ゼミ案内」「原始仏教ってなに」「原始仏教聖典目録」「森先生のページ」「掲示板&チャット」「リンク集」「卒業論文の書き方」である。学生の執筆した部分は「原始仏教ってなに」である。なお「リンク集」は大学院生の今野道隆が担当し、アップ作業は四年生の伊東実咲が担当した。「ゼミ紀要」「名簿」「OBのページ」もアップする予定で現在作業中である。他に「東洋大学印度哲学科森ゼミ」のホーム・ページ <http://blaza@mh.n.u-tokyo.ac.jp/~noriseminar/> がある。これも本ゼミのホーム・ページであるが、これは卒業生有志が運営している。

個人研究は例年通り、夏休みの合宿（九月二十一日～二十三日）

山中湖セミナーハウス）と後期の最初の二時間に、四年生は卒業論文・卒業制作、三年生は卒業論文を視野において自由研究の研究発表を行った。なお原則として毎月第一週は卒論・卒制の指導も行っている。

また三月末には『二〇〇二年度 森ゼミ紀要』第十一号を発行する予定である（第一号は別形式の冊子として制作したので、これを入れると通算十二号となる）。

伊吹 敦

インド哲学仏教演習⑥ 白山（乗り入れ）

① テーマ「禅思想研究」

② メンバー 鈴木和陽（幹事）他、四年生六名、三年生三名、二年生二名

本ゼミは、中国仏教の中でも、最も中国的な性格を多分に持つ「禪」を中心に、その思想の特質や成立、変化をたどってゆくことを目的とするものである。

今年度も、例年と同様、年度はじめに学生と話し合いを行なって、使用する文献を最も代表的な禅文献の一つである『臨濟録』に決定した。

岩波文庫本をテキストとし、あらかじめ決めておいた担当者にレジュメを作ってきてもらい、それをたたき台として全員で討論を行なった。このテキストには訓読と翻訳が附されているので、漢文読解の訓練という点では十分ではなかったが、出席者の漢文の

素養を考えれば、致し方ない点もあったように思われる。それでも、多少なりとも漢文に馴染んでもらうために、訓読に沿って元漢文に返り点を付すようには指導を行なった。

今年度、新たに参加した学生には熱心な学生が多く、そうした学生には非常に出席率の高いものが多かった。特に、曹洞宗の僧侶や中国で育った学生や哲文の学生が新たに加わったことは、他の学生にも大きな刺激を与え、時として非常に活発な議論が行なわれた点は非常によかった。そのため、課外活動として行なった、鎌倉への小旅行（夏季）や河口湖セミナーハウスでの合宿（春季）はかなりの盛り上がりを見せた（前者は、あいにく天気が非常に悪く、予定通りの活動ができなかったことは遺憾であった）。

ゼミ活動のもう一つの柱である卒論指導については、例年通り、授業中での発表はなるべく差し控え、研究室での個別指導で対応しようとしたが、学生の卒論への取り組みの遅さを思うと、卒論に対する意識を高める工夫も必要であったかも知れない。

竹村牧男

インド哲学仏教学演習⑦ 白山（乗り入れ）

① テーマ「古代日本仏教の人間観（聖徳太子から平安時代まで）」

② メンバー 松本百合子（幹事）・元木裕（副幹事）他、四年生十名、三年生十三名、二年生一名

③ 活動報告

本年度は、日本仏教のなか、聖徳太子より平安時代にいたるまでの代表的な祖師方等の思想のなか、特に人間観をテーマに研究発表をしてもらった。研究発表は、学問の方法を身につけてもらい、卒論の準備をしてもらうためである。

前期当初、四年生に卒論構想を発表してもらったが、ほとんどの者が単に漠然とした考えを述べるにとどまり、研究発表の体をまったくなしていなかった。

それが、三年生にも影響し、三年生のテーマを設定した研究発表も低調であった。そこでかなり注意・助言した結果、研究発表らしきものがなされるようになった。

特に、夏、合宿での班ごとの研究発表は、準備もよくなされ、見るべきものがった。

後期に入ると、四年生は卒論にとりかかることになり、研究発表は三年生が中心となったが、よく調査が行き届くようになり、それぞれ進境いちじるしいものとなっていた。もちろん、不十分な点も見られたが、この発表をもとに、年度末には一発表四〇〇字二〇枚程度の小論を作成し、論集を編むことにしている（四年生は卒論の概要）。研究発表のテーマには、聖徳太子、三論宗、法相宗、華嚴宗、最澄、空海などが取り上げられたが、中では空海がもっとも人気があった。

日頃の授業以外には、上述の合宿（二泊三日）を一回行ったが、よく学びよく遊ぶ、楽しい合宿であった。他に歓迎コンパ、追い

出しコンバを行った。

川崎信定

インド哲学仏教学演習⑧ 白山(乗り入れ)

① テーマ「中観・唯識思想基礎的原典の講読研究―『唯識二十論』

② メンバー 床井早野香(幹事)・石原草吉(副幹事) 他、四年生十四名、三年生六名、二年生一名、大学院生一名

③ 活動報告

インド大乘仏教の重要教理の一つである唯識思想の基礎的原典の講読を通じてテキスト批判・文献取り扱いの基本を養成し、今後の卒論研究の基盤を作ることとしたとされたセミナー。今年度は四世紀ごろにヴァスバンドウ(Vasubandhu、世親)が著わした唯識思想の代表的な論書・二十の韻文からなる『唯識二十論』を取り上げた。上級生から下級生までが均等に入るように五班に分けて、毎回各班がサンスクリット原文を担当する輪番制。当番はローマ字テキストとレジメ翻訳を授業前にコピー配付して、授業中に「夢と現実の違い」・「地獄の住人」などのテーマを決めて思想内容ディスカッションをした。夏の合宿は九月五日・六日に豊丘セミナーハウスで一泊二日をかけて四年生による卒論の執筆内容・「アヒンサー」、「他人の存在」、「女性の説法」、「仏教と香」、「チベット医学書」などの経過報告と花火大会。帰りのバス内では、「中村元の世界」のビデオを見た後、共同討議。でも

前夜に張り切りすぎて新宿に着くまで何の記憶もない人も？ 気合を入れたコンバとともに、出席のチェックと実力養成の鞭はかなり厳しかった。

平成十四年度開講科目

Ⅰ部

朝霞開講科目

インド宗教史

仏教学概論（仏教とは何か）

ヒンドゥー教概説

インド仏教史

中国仏教史

日本仏教史

サンスクリット文献講読①・②

インド古典講読（サンスクリット説話劇 Pratinidhika

をよむ）

インド哲学仏教学演習①

インド哲学仏教学演習②（ヒンドゥー教思想入門）

インド哲学仏教学演習③（宗密『原人論』講読）

インド哲学仏教学演習④（インド仏教文献講読）

白山開講科目

アビダルマ哲学

卒業論文（制作）

Ⅱ部

インド宗教史

仏教学概論（仏教とは何か）

アビダルマ哲学

ヒンドゥー教概説

インド仏教史

中国仏教史

日本仏教史

日本思想史（外来思想の受容と変容）

東洋思想

サンスクリット文献講読

インド古典講読

卒業論文（制作）

Ⅲ部

相互乗入れ科目Ⅰ

宗教概論
比較宗教学（「意識」とは何か？—比較思想的試論）

インド古典哲学

インド現代思想

インド文学

インド・仏教図像学（インド・チベット密教図像学入門）

インド文化論Ⅰ（インドの芸術—人を夢中にさせる装置）

菅沼 晃

森 章司

池田練太郎

橋本泰元

渡辺章悟

伊吹 敦

竹村牧男

三澤勝己

佐久間秀範

渡邊郁子

渡邊郁子

島田茂樹

菅沼 晃

竹村牧男

橋本泰元

佐藤 厚

島田茂樹

池田練太郎

川崎信定

司馬春英

宮本久義

宮本久義

上村勝彦

島田茂樹

インド文化論Ⅱ（インドの歴史と文化）	清水 乞	インド哲学仏教学演習③（中世ヒンドゥー教思想研究）	橋本泰元
仏教文化論	石川 寛	インド哲学仏教学演習④（インド大乘仏教の研究）	渡辺章悟
仏教思想論Ⅰ	権田ソナム・ギャルツェン	インド哲学仏教学演習⑤（原始仏教研究）	森 章司
仏教思想論Ⅱ	渡辺章悟	インド哲学仏教学演習⑥（禅思想研究）	伊吹 敦
仏教思想論Ⅲ	川崎信定	インド哲学仏教学演習⑦	竹村牧男
ヨーガとその思想（その実践をまじえて）	金子芳夫	インド哲学仏教学演習⑧	川崎信定
浄土教の思想と文化（ブツダから親鸞へ）	番場裕之		
密教の思想と文化	本多静芳		
禅の思想と文化	眞柴弘宗	△大学院▽	
法華経の思想と文化	伊吹 敦	博士前期課程	
華嚴経の思想と文化（八十卷華嚴経の現代日本語訳と漢訳）	小松邦彰	サンスクリット文献研究Ⅰ・インド哲学研究指導Ⅰ（古典	菅沼 晃
原典研究）	小島岱山	サンスクリット文学の研究）	清水 乞
パリー文献講読	石上和敬	インド哲学研究Ⅰ・インド哲学研究指導Ⅱ	橋本泰元
仏教梵語講読	佐久間秀範	インド哲学研究Ⅱ・インド哲学研究指導Ⅲ（中世インド思想研究）	
ヒンデイー文献講読	橋本泰元	初期仏教研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅰ（律蔵による釈尊教団形成過程の研究）	森 章司
チベット文献講読	川崎信定	初期仏教研究Ⅱ（パリー仏教研究）	森 祖道
仏教漢文講読	伊吹 敦	大乘仏教研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅱ（インド後期大乘仏教論典原典研究）	川崎信定
外国語文献講読	村石恵照	大乘仏教研究Ⅱ（經典の批判的研究）	渡辺章悟
欧文仏典講読	吉田 収	大乘仏教研究Ⅲ（『瑜伽師地論』を読む）	横山紘一
仏教と社会（仏教と戦争協力・医療・女性差別）	伊吹 敦	中国仏教研究Ⅰ	小島岱山
インド哲学仏教学演習①（インド美学と芸術思想）	清水 乞		
インド哲学仏教学演習②（インド思想の人間観）	菅沼 晃		

日本仏教研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅲ（日本華嚴の研究）

竹村牧男

博士後期課程

平成十四年度卒業論文

インド哲学特殊研究Ⅰ・インド哲学研究指導Ⅰ（インド哲

学・仏教学の諸問題）

菅沼 晃

（Ⅰ部）

鈴木 恵子 死生学と宗教・死の受容について―無宗教者の死

インド哲学特殊研究Ⅱ・インド哲学研究指導Ⅱ（サンスク

リット語韻律論の研究）

清水 乞

丸山健一郎 幽玄とDharmi

仏教学特殊研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅰ（律蔵の比較研究）

森 章司

斎藤 淳也 初期仏教における認識論

仏教学特殊研究Ⅱ・仏教学研究指導Ⅱ（仏教と他派との思

想交流）

川崎信定

佐藤 住伊 『諸文化を越えた女性仏教徒』一部訳

仏教学特殊研究Ⅲ

仏教学特殊研究Ⅳ・仏教学研究指導Ⅲ（日本の唯識研究）

小島岱山

中村 修大 手塚治虫と『ブッダ』―「生」と「死」について

の手塚氏の捉え方

林 柔人 清規の伝来と茶の湯のはじまり―初期の大徳寺史

を交えて

註

中村 貴寿 「The Lotus Sūtra and the rhetoric of legitimiza-

tion in eleventh-century Japanese Buddhism」訳

佐貫 直哉 阿育―ダルマ・アショークカへの変貌と、その政治

的リーダーシップ

相谷 学 禅僧 沢庵宗彭の考察

阿部田みづほ 『仏説地藏菩薩発心因縁十王経』と『仏説預修

十王生七経』における地藏菩薩と閻魔王の同一性

大川 笑 『般若心経秘鍵』にみられる空海の思想的特色

伊東 実咲 歓喜天に関するお寺のイベントを紹介するホーム
ページの作制

岡田実永子 『秘蔵宝鑑』における空海の人間観

矢澤 太輝 ガンデーと非暴力思想

小宮 生也 ガンジーに見るインド思想

川越 幸子 イスラームの性質とその拡大

三宅 弘美 日本の公教育における宗教教育のあり方

前 ゆうき インド古典舞踊の魅力—Nāṭya-sāstra における目
の動きについて

齋藤 富之 床屋政談—弘法・空海・真魚

北澤 浩平 宗教の起源と意味

松本百合子 『真盛上人往生伝記』に見る真盛の人間像

高津 悟史 奈良時代の仏教—弥勒信仰から阿弥陀信仰へ

川合 都 インド神話における武器とその威力—『ラーマー
ヤナ』と『マハーバーラタ』に登場する武器

村上 雅博 仏教における死—死の克服

萩原 俊 nithuna から見るインドの性

塩浦美和子 *ritas* 写真集—日常の体験を印度美学的に考える

坂部 舞子 空海の即身成仏思想

丹野 雄士 現代諸宗教問題についての一考察

豊田 未歩 地獄起源ネアンデルタール説

堀籠 裕範 日蓮聖人の女性観—遺文を通してみるその魅力

峰 尚子 『維摩経』におけることばの考察

床井早野香 『勝鬘経』成立に於ける女性観の変遷

渡辺 恭佳 アーラヤ識とマナ識の関係とその違い

黒須 茜 『ボンベイ』映画評論—映画としての「ボンベイ」

高橋 勝 世阿弥の美と *ritas* 論

宇山 浩史 Rāmakaṣṇa のトランス体験—その少年時代から

Kālī 見神までの考察

井口 友美 『正法眼蔵』「仏性」の巻における道元の仏性観に
ついて

鈴木 怜 廢墟の美について—美の要素の抽出と分析

後藤 美緒 Theragāthā, Therīgāthā における比丘と比丘尼の
比較研究

矢内 裕子 *Svapūrāṇa* 抄訳

鈴木なつみ 廢仏毀釈とその精神

藤井 保徳 唯識三性説の研究と比較思想

中山 敬朗 悲劇からの美的享受—*ritas* と能美学の比較考察

入倉日奈子 ヴァーグナーとインド美学思想

五十嵐 竜 いさお君に見る仏教境地

及川 勇介 道元の時間論の意義

河合 友紀 物と心—意識や意味

菅野 馨子 デイグナーガのアポーハ論—“Pranāśamu-ccaya”
第五章を中心に

川島 詩生 『観心覺夢鈔』に見る日本唯識の特徴

瀧 友美 インドの祭礼とシャーマニズムの関係について

高尾 舞子 『パンチャタントラ』の教訓について

平岩 麻実 原始聖典から見る僧院について―律藏を中心にして

中川由紀子 ラビンドラナート・タゴールにおける言語世界観
佐度 幸恵 インド舞踊にみる文化と思想―バラタナーティヤムに顕現されるものとは

荒井由香里 白衣観音について―『覚禪抄』による

高橋 直渡 パーリテキスト版 UDĀNA―八十偈に見る仏説の大意について

布施 祥太 『教行信証』「行巻」の行の研究

射場 京子 『毘婆沙論』における小倉百人一首の観照

飯島 俊哲 『金剛頂経』の「五相成身観」における(さとり)の構造

神田 健志 インドにおけるリンガの意味―「リンガ・プラーナ」抄訳におけるリンガ崇拜を中心として

戸谷佐知子 習合の本質

松田 雅彦 利那の生から存続する生へ―経量部による自己同一性論証

勝沼 理恵 インド中世、ムガル帝国史に残る建造物

木村 智沙 法然の念仏思想―南都浄土教からの影響

樋引 哲也 不可触民制度の歴史的・思想的背景

岸和田 崇 現代日本における体育会の精神性―東洋大学体育

会少林寺拳法部を例に

Ⅱ部

サイロー・テイラワット 日本宗教の布教活動について真如苑を中心に

江成 紀子 新ニヤヤー学派の非存在論―ガンゲーシヤによる

『タットヴァアチンターマニ』「アバーヴァ・ヴァーダ」日本語訳の試み

葛木 光久 『火の鳥』における手塚治虫の輪廻観および業観について

川名 静江 『聖徳太子絵伝』の成立―法隆寺東院絵殿の「聖徳太子障子絵」からの考察

石垣 正人 天の言葉集

浅川 南領 インドにおける牛崇拜の考察

高橋 宇為 遍路を思う―四国遍路体験の自己考察

外崎 誠 アショーカ王の治世について

水野 雄大 シェイクスピア悲劇作「ハムレット」とラサ論

渡邊 康緒 勝海舟の剣と禪の思想

小野 高弘 *śāstra*のインドにおける地位の変化

横田由美子 仏教における非暴力 (*ahimsa*) と戦争・平和の研究

石羽澤まゆみ 長寿を願う―アシユタインガ・サングラハ第一章より

川原 和子 チベット医学『ギュー・シ』にみられる病の根元の探求

出堀 道子 香と仏教と私

石原 草吉 不成因 (asiddha) 論の確認とその実用のために――

Nyāyabindu に拠る

戸塚しのぶ 絵本ラーマーヤナ―誰でも読めるやさしいラーマー

ヤナ

飯塚 幸弘 不可触民問題とガンディー―ヤング・インディア

に見るガンディーの思想

磯部 知里 タントラの宇宙展開と思想

井原香奈江 『マヌ法典』におけるインド女性の地位

沖田 寛之 食からみたインド

菊地 恵美 地獄思想の起源―私の地獄思想とは

近 吉則 『法華経』における菩提心思想

酒井真理江 仏典に出現せる震動の研究

榊原 紀子 ウパニシャッドの語義解釈について

笹井 なみ ジャッカルとワニーインドの民話の翻訳

鈴木 勇 矛盾ということ―「たたかっていたらまけないの

です。」ガンディーの「矛盾」をめぐる考察

鈴木健太郎 タゴールが見た日本

中野 歌織 アンベードカルの仏教観

野田 康司 ATHARVA VEDA SAMHITA の翻訳

星 祐紀 宗教的冒瀆―『悪魔の詩』の場合

山村 公司 「旅行者の見たインド」宗教文化」

渡邊 祥人 世界の宇宙論と古代インド

吉次 通泰

わが国における終末期医療への古代インド医学的
対処法の展開―古代インド医学書『チャラカ・サ

ンヒター』indriyasthānam のサンスクリット原

典翻訳を含む

大学院修士論文

満 達 モンゴル語訳 pañcatantra の文献学的研究

柁 成二 「聖天」その図像と道場観―『別尊雜記』を中心
として

東洋學論叢 第28号

(東洋大学文学部紀要 印度哲学科篇 第56集)

平成十五年三月三十日 印刷

平成十五年三月三十日 発行 [非売品]

発行所 東洋大学文学部

東京都文京区白山五―二八―二〇

電話 印度哲学科 (九九五) 三三九

印刷 ヨシダ印刷株式会社

東京都墨田区亀沢三―二〇―一四

電話 〇三―三六二六―一三〇一

BULLETIN OF ORIENTOLOGY

Bulletin of the Faculty of Letters

Toyo University

NO. 56

March, 2003

Series of

INDIAN PHILOSOPHY

XXVIII

CONTENTS

- SHIMIZU, Tadashi : The Ideals of Indian Arts and Their Ends (10)
- MORI, Shoji : Shinran and Zenran in Shinran's Letters (27)
- TAKEMURA, Makio : NISHIDA Kitaro's Interpretation of the
Thought of *Shin-shū* (74)
- IBUKI, Atsushi : The Trend of Cha'n Buddhism of the Later Eighth
Century Reflected in the *Niàn-fó-jìng* (95)
- WATANABE, Shogo : On Omniscience in the *Perfection of
Wisdom in Eight Thousand Lines* (165)
- HASHIMOTO, Taigen : A Japanese Translation of "Jñāna caurītisā"
in the Kabīr's Bijak (172)
- KAWASAKI, Shinjo : Tibetan Translations Compared with a Sanskrit Text
— The Ninth and the Tenth Chapters of Bhavya's
Madhyamaka-hṛdaya-kārikā (184)
- SUGANUMA, Akira : A Japanese Translation and Notes of the
Siddhāntakaumudī, Kāraṅgaprakaraṇa (IX)
— The Meanings and Usages of the Seventh Case (*saptamī vibhaktih*)
..... (214)
-

Published by

TOYO UNIVERSITY

Hakusan, Bunkyo-ku, Tokyo